県内学生ボランティア 被災地入り

復興拠点整備に汗

宮城・石巻 住民と交流も

岡山経済同友会（岡山市北区厚生町）の呼び掛けで集まった大学生らで組織する「東日本大震災復興支援ボランティア」の一行が25日、被災地の宮城県石巻市雄勝町に入り、活動を開始した。27日までの3日間、同市と岩手県大槌町を回り被災者との交流、清掃活動などに取り組む。

一行は県内の11大学・短大に通う40人と同友会会員ら14人の計54人。24日午後に岡山市をバスで出発し約15時間かけて到着した。現地で活動する国際医療ボランティア・AMDA（本部・岡山市）の仲介で、津波被害を免れた同市雄勝町の旧桑浜小学校（2001年に廃校）を訪れ、親子で自然体験などができる交流拠点に再生する作業を手伝った。

同地区は宮城県北東部の沿岸に位置し、震災時には高さ約20㍍の津波が押し寄せ、死者・行方不明者は約230人に上った。市中心部の仮設住宅への転居者が増え、人口は4分の1の約千人まで減少したという。このため地元ボランティアらが復興の足掛かりにしようと、来春の使用を目指して4月から作業を進めている。

一行は約5時間、同校の裏山から崩れ落ちた土砂の撤去や木の伐採、校庭の草抜きに汗を流した。倉敷芸術科学大3年佐藤明さん(21)は「わずかでも復興に携われたことがうれしい。10年、20年後にどう変わっているかが楽しみ」と話していた。

ボランティアは、岡山経済同友会が今後の復興を担う若者に被災地の現状を知ってもらおうと毎年企画し3回目。（安部晃将）

旧校舎裏の土砂を片付ける学生